

## 私のコロナ時代体験記 1

野口幹夫

毎朝、雨でなければ、湘南海岸までスロージョギングし、ラジオ体操の仲間に加わります。この習慣を得たのは、去年7月膝の手術をしたあと、病院でリハビリ運動をした延長線で朝早くに海岸にでたのがきっかけでした。このグループはもう長年やっておられるそうで、リーダーをしている本田さんは95才、澁刺としておられます。負けておられないという気にさせられます。



6時過ぎの海岸は、結構にぎやかです。ウォーキングの人、犬の散歩、それになんといってもサーファーです。波のいい日は茅ヶ崎海岸から江の島海岸まで一目1000人のサーファーが、勤めに出る前のひと時を楽しんでいます。

それが一変しました。

4月22日朝、江の島から茅ヶ崎にかけての見渡す限りの海岸に、人影が消えたのです。ひと一人いないのです。ぞっとしました。まるでこの世の終わりの風景を見てしまったような風景でした。

海岸には立ち入り禁止の張り紙が一斉に張られています。

これはどういうこと？

海岸にコロナウイルスがいるわけでもない。風は吹き、太陽は紫外線を浴びせています、逆にいまこそ皆この安全は海岸で、ウォーキンやサーフィンなど得

意なことをして、健康増進をはかって、コロナ感染に備えなければならない時です。これは正しい措置なのか？

コロナ騒ぎで一番変わったことは、為政者の行動に注目が集まったことです。世界中の為政者権力の座にある人達の資質が、コロナ騒動で一番あぶり出されました。「コロナなどちょっとしたインフルエンザと同じだ」と言い放ったどこかの国の大統領ふたり。その国民はみじめです、死者の数がうなぎのぼりです。

人間性にあふれ、正しい将来を見つめている指導者の必要性を今回ほど身に染みて感じたことはありません。民主主義のルールの選挙に乗って権力の座に就いたからといって、それは保証されないことを今回あからさまになりました。

コロナは天啓なのかもしれません。